

藤並の森

Vol.30

高知県立文学館



●土佐郡土佐町「晚秋」(写真提供／横田鐵喜)

リレー随筆⑩ ヘルマン・ヘッセと蝶 —— 岡田 朝雄

「その蝶は私の方に飛んできて、すぐそばの地面にとまり、雪花石膏^{アラバスター}のようないあのすばらしい羽をゆっくり動かした。それで私はその羽の繊細な模様や丸み、きらめくダイヤモンドのような翅膀を、そして双方の羽の鮮血のように真つ赤な二つの斑紋を見ることができた。遠い日の思い出の中でも、この光景を見たときに私を貫いた、息づまるような、胸もときめく歓喜ほど強烈に、そして鮮明に私の記憶に残っているものはない」

一九一一年三十四歳のとき、ヘッセは『グジャクヤママユ』という短編を書いた。この作品は二十年後に手を加えられ、改題されて新聞に発表された。これが一九四七年わが国の『中学国語』の教科書に掲載され、以来現在まで半世紀以上も中学生に読まれ続けている『少年の日の思い出』(高橋健二訳)である。

「その蝶は私の方に飛んできて、すぐそばの地面にとまり、雪花石膏^{アラバスター}のようないあのすばらしい羽をゆっくり動かした。それで私はその羽の繊細な模様や丸み、きらめくダイヤモンドのような翅膀を、そして双方の羽の鮮血のように真つ赤な二つの斑紋を見ることができた。遠い日の思い出の中でも、この光景を見たときに私を貫いた、息づまるような、胸もときめく歓喜ほど強烈に、そして鮮明に私の記憶に残っているものはない」

ヘルマン・ヘッセは幼いころから動物や植物が好きで、中でも蝶には心ひかれ、すでに四、五歳頃から蝶の採集を始めていた。当時ヘッセ一家は、父の仕事の関係でイスイスのバーゼル市郊外に転居していた。その家の裏手から広大な牧場が広がり、そこには美しい野草が咲き乱れ、キアゲハ、ヤマキチョウ、コムラサキ、キベリタテハを中心とした蝶たちが飛びまわっていた。幼いヘッセにとってこの光景は「両親の面影よりも早く」心に刻まれ、その思い出は「どんな人間の顔や、耐え忍んだ運命の思い出よりもなつかしい」ものであった。特にアーヴィング・スパシロ・チョウを見たときの感激は、こう書かれている。

「クジャクヤママユ」を書いた年、ヘッセは東南アジアへ旅行しているが、その目的の一つは蝶の採集であった。一九一三年の暮れに、ヘッセは姉に宛てて「蝶の採集と魚釣りは私的人生の二つの大きな愉しみでした。そのほかのことは私にはあまり大切ではありませんでした」と書いている。しかし、これほど熱中した趣味に終止符が打たれる時がくる。一九一四年、第一次世界大戦の勃発である。蝶の採集やコレクションはやめたけれど、ヘッセは蝶に対する興味を失ったわけではない。晩年にいたるまでに、蝶についての詩やエッセイが数多く書かれているからである。中でも「蝶について」は、七十年近く前に、しかも非常に忙なときに何の準備もなく書かれたにもかかわらず、まさに現在私たちが直面している教育問題、環境問題の本質を衝く文章を含むすばらしいエッセイである。

私も中学生のときこれを読んだ。當時私はこの作品に出でてくる少年たちに劣らず蝶の採集や飼育に熱中しており、暇さえあれば採集用具を抱えて山野を駆け巡っていた。そんな私にとてもこの作品はまさに運命的な出会いとなつた。大学時代にこの作品の原書を読み、大学院時代に高橋健二先生に教えて受け、この作品に対する私の思いを聞いていた。そしてその後、この作品の初稿『クジャクヤママユ』を含む詩文集『蝶』を翻訳出版する機会に恵まれ、それがきっかけで今日までに八冊のヘッセ作品集を翻訳出版することができたからである。

『クジャクヤママユ』を書いた年、ヘッセは東南アジアへ旅行しているが、その目的の一つは蝶の採集であった。一九一三年の暮れに、ヘッセは姉に宛てて「蝶の採集と魚釣りは私的人生の二つの大きな愉しみでした。そのほかのことは私にはあまり大切ではありませんでした」と書いている。しかし、これほど熱中した趣味に終止符が打たれる時がくる。一九一四年、第一次世界大戦の勃発である。蝶の採集やコレクションはやめたけれど、ヘッセは蝶に対する興味を失ったわけではない。晩年にいたるまでに、蝶についての詩やエッセイが数多く書かれているからである。中でも「蝶について」は、七十年近く前に、しかも非常に忙なときに何の準備もなく書かれたにもかかわらず、まさに現在私たちが直面している教育問題、環境問題の本質を衝く文章を含むすばらしいエッセイである。

△ 東洋大学教授

◆秋の企画展紹介◆

「ヘルマン・ヘッセ展——画家と詩人——」

—展覧会への誘い—

2005年10月7日(金)～11月20日(日)

一〇〇五年と六年は、「日本におけるドイツ年」です。そこで、高知県立文学館では、ヨーロッパ及びアメリカ圏以外では、日本において最も愛読されている

「ヘルマン・ヘッセ」に焦点をあて、十月七日(金)から十一月二十日(日)まで、「ヘルマン・ヘッセ展——画家と詩人——」を開催いたします。

二度の世界大戦に見舞われ、混乱と絶望からはじまつた「二十世紀」。その中でロマン・ロランらとともに



戸外で水彩画を描くヘッセ（1929年頃）



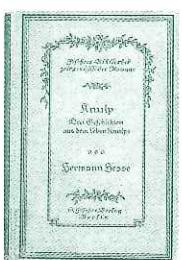
1925年6月24日のスケッチ



『ペーター・カーメンチント』
(1904年刊)



『インドから』(1913年刊)



『クヌルプ』(1915年刊)

高度な精神文化と理想郷を通して唱え続けたヘルマン・ヘッセですが、スウェーデンのノーベル賞委員会の「ヘルマン・ヘッセは、シユテファン・ゲオルゲ、ライナー・マリア・リルケ以後のドイツの最大の詩人である」という声明のもと、一九四六年にノーベル文学賞を受賞しています。ヘッセは「車輪の下」「荒野の狼」「シッダルタ」など、日本人に最も親しまれ、今日においても私たちに深い感動を与え続けている文学者の一人です。

今回の展覧会では、ヘッセの遺族のもとに残されたコレクションの中から、ヘッセの水彩画を中心に、初版本、遺愛品等百十点を厳選して一堂に展覧します。また、「日本人とヘッセ」のコーナーを設け、日本人とくに、日本にヘッセを紹介した片山敏彦を中心に、ヘッセが日本人にどのように影響を与えたか、紐解いてみたいと思います。

ヘルマン・ヘッセは、一八七七年、ドイツ南部「黒い森地方」の小都市カルブに生まれました。父が官教師という厳格な家庭に育った彼は、土地の秀才として育ちますが、十五歳のとき、難関を突破して入学した神学校を脱走、自殺未遂事件を起こすなどして人生の困難に出会います。その後、職を転々とし、十八歳でヘッケンハウアー書店の見習いとなりました。この頃から本格的に詩を書き始め、以後十年間、古書店の店員として勤めながら、執筆を重ね、二十七歳の時書いた小説「ペーター・カーメンチント」(郷愁・青春彷徨)がベストセラーとなり、新進作家の地位を確立。文筆家としての道を歩み始めます。以後「車輪の下」「ゲ

ヘルマン・ヘッセ
は、一八七七年、ドイツ南部「黒い森地方」の小都市カルブに生まれました。父が官教師という厳格な家庭に育った彼は、土地の秀才として育ちますが、十五歳のとき、難関を突破して入学した神学校を脱走、自殺未遂事件を起こすなどして人生の困難に出会います。その後、職を転々とし、十八歳でヘッケンハウアー書店の見習いとなりました。この頃から本格的に詩を書き始め、以後十年間、古書店の店員として勤めながら、執筆を重ね、二十七歳の時書いた小説「ペーター・カーメンチント」(郷愁・青春彷徨)がベストセラーとなり、新進作家の地位を確立。文筆家としての道を歩み始めます。以後「車輪の下」「ゲ

ルトルート」（春の嵐）「インドから」など、精力的に作品を発表します。しかし、第一次世界大戦中反戦を訴えて、ドイツのマスコミから排斥され、苦しみの日々を送りますが、四十七歳の時、イスラエル籍を得て南イスラエルに定住。美しい自然に囲まれた平穏な半生を過ごし、八十五歳で生涯を終えています。

今回の展覧会では、晩年イスラエルのモンタニヨーラの地で描かれたヘッセの水彩画を中心に紹介しています。ヘッセが本格的に絵を描き始めたのは、四十歳を過ぎた頃からでした。自らの体験とともに、近代人の苦悩を詩や小説に綴り続けたヘッセですが、第一次世界大戦期における過酷な立場や度重なる家族の不幸に、彼は精神の危機を迎えることとなります。一九一二年以来、ベルンに住んでいましたが、心ならずもヨーロッパにおける大規模な民族殺害をこの地から見守ることになります。ヘッセは、イスラエル、三十編以上の政治的論説と呼びかけ文をもつて、戦争の狂気と闘いました。しかし、ドイツのマスコミからは「祖国を汚す者」、「義務回避者」、「亡国の徒」などとして告発されます。そしてこのことは彼をアウトサイダーとして、精神的な試練の場にたたすこととなりました。それは最初の妻マリア・ベルニにとっても、同じことでした。また、三男マルティンの病気も加わり、ヘッセは窮地へ追いやられました。まさにこの時でした。これらの彼を取り巻く環境は、彼をキャンバスへと向かわせました。

た。すべてのものを寸断する破壊に対抗するかのように、絵を描きはじめました。やがて、ヘッセは、水彩画を描く欲びに触れ、絵を描くことで癒やされていける自分を発見してゆくのです。二十世紀の世界文学を代表するヘッセが、困難の中、人生半ばに見いだした色彩の魔法。彼は、スケッチブックと絵の具を抱えて、近隣の山々を散策し、立ち止まって水彩画を描き続けました。

ヘッセ自身が詩「画家の欲び」などでも詠つているように、絵を描くという営みは、ヘッセの作家としての自我の解放と、より精度の高い文学作品を生むため

の大切な「儀式」の一つになっていたのかかもしれません。

晩年ヘッセは読者に「人間がすることのできる最も美しい二つのことは、私にとっては音楽を演奏することと絵を描くことです。私はこの二つのことをたゞデイレクタントにやつたにすぎませんが、しかしそれは、生きてゆくことに耐えるという困難な課題にぶつかった時に、私を非常に助けてくれました」と手紙を送っています。

現代人に必要とされている癒やしの空間を、ヘッセが愛したモンタニヨーラの風景を通してお届けいたします。

また、今回、高知で開催するにあたって「日本人とヘッセ」（特に片山敏彦との関係）をご紹介しようとコーナーを設けました。片山敏彦はヘッセの詩を多く翻訳しています。（『ヘッセ詩集』を昭和三十八年にみすず書房から出しています。）ヘッセについての評論やエッセイも執筆しています。（『紫水晶』の「詩人としてのヘルマン・ヘッセ」「ヘルマン・ヘッセの歩いた道」、「泉のこだま」の「ロマン・ロランとヘルマン・ヘッセ」、「詩と文化」における「ヘルマン・ヘッセ」、「詩と文化」など）片山敏彦の言葉を通してご紹介いたします。（主任学芸員／津田加須子）

■ 関連企画 ■

ヘルマン・ヘッセ展記念講演会

「ヘルマン・ヘッセと蝶」

講師：岡田朝雄氏（東洋大学教授）

日時：10月29日（土）午後2時～

場所：文学館ホール（文学館1階）

参加：無料（定員100名／事前申し込み）

※ご住所お名前を明記のうえハガキ又はFAXにて申し込みください

ドイツ映画上映会

日時：10月30日（日）、11月5日（土）、11月6日（日）

各日午後2時～

場所：文学館ホール（文学館1階）

参加：無料（当日先着100名）

◆10月30日（日）午後2時～

「カリガリ博士」（1919年／50分／モノクロ、字幕）

監督：ロベルト・ウイーネ

ドイツ表現主義を世に知らしめたホラー映画の最高傑作。

◆11月5日（土）午後2時～

「コブラ・ヴェルデ」（1988年／111分／カラー、字幕）

監督：ヴェルナー・ヘルツォーク

奴隸制度を題材に一人の男の数奇な人生を描いた野心作。

◆11月6日（日）午後2時から

「突然裕福になったコンバッハの貧しい人々」

（1970年／93分／カラー、字幕）

監督：フォルカー・シュレンドルフ

実際に起きた現金強奪事件を題材にその過程と結末を描く。

朗読の会「日本人とヘルマン・ヘッセ」

日時：11月19日（土）午後2時～

場所：文学館ホール（文学館1階）

参加：無料（当日先着100名）

ロビーコンサート

ヘッセが好んだ音楽を楽しむミニコンサートです♪

日時：11月3日（木）午前11時、午後2時（2回公演 各回約20分）

場所：文学館2階ロビー

参加：ヘルマン・ヘッセ展のチケットが必要です

展示解説

日時：10月7日（金）、16日（日）、22日（土）、11月13日（日）

各日午前10時、午後2時（各回約40分）

場所：2階企画展示室及びロビー

参加：ヘルマン・ヘッセ展のチケットが必要です

学芸員メモ

ある書簡から — 寺田寅彦と篠崎長之

あらためて紹介するまでもなく、寺田寅彦（一八七八—一九三五）は、物理学者にして随筆家として科学・文学両方から高い評価を得ています。当館には、寺田寅彦記念室があり、ご遺族からの一括点贈や縁のあった方々の寄贈を受け、科学から芸術まで多様な資料を収蔵しています。今夏、新たに、寺田寅彦書簡二十点の寄贈がありました。寅彦からの書簡の宛名は、篠崎長之氏。一九二六年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業した寅彦は、帝大物理学部物理学科を卒業した寅彦の弟子にあたります。

篠崎長之氏（一八九七—一九六九）は、栃木県宇都宮市生まれ。県立宇都宮中学、第二高等学校（仙台）を経て東京帝国大学に進み、卒業直後の三月に高知高等学校に赴任しています。一九四四年八月末まで約十八年間、物理の教授を務められました。同年、清水高等商船学校に転任。高等商船学校、商船大学教授を経て、一九五七年から六一年まで東京商船大学教授。定年で退官後、一九六三年から六七年まで東海大学理学部物理学科の主任教授として後進の指導にあたられました。

高知高等学校で篠崎氏に物理を習った上田壽氏（高知大学名誉教授）は、「寺田寅彦断章」で篠崎氏を描いたスケッチを添えて「背丈はあまり高くなく、多少、エノケンに似たところのある飄々とした風貌をしておられた」と紹介し「高校に入つてはじめて物理学の面白さを先生から教えていただいた気がする」と記しています。寺田寅彦が第五高等学校（熊本）で田丸卓郎と出会い、その時に教わったものが「物理そのもの」として「頭に沁み込み」「自分の中では活きてはたらいてい



1929年8月13日・葉書

◇一九二九(昭和四)年八月十三日／葉書
四国の地形の研究を進め、高知の地形調査がまとまれば発表したい旨が書かれています。また、篠崎氏の提馬風(提馬風、鎌鼬)についての考察に対し、色々な現象が一つの名称で呼ばれることも考えられる、と投げかけています。提馬風は、寅彦が「怪異考」(一九二七年)に高知の「孕の

書簡は一九二九年から寅彦が亡くなる三五年までの二十点。封書が十三通、葉書が七葉あります。

◇一九三〇(昭和五)年八月二十日／封書
「太陽黒点と地震の関係」の「気象集報」にて、また、寺田寅彦全集二十ハ三十巻(一九九九年刊)に収録されていますが、改めて紹介いたします。

◇一九三〇(昭和五)年八月二十一日／封書
研究について多田文男(当時地震研究所助教授)の研究が参考になるとして、寅彦の研究も送ると記しています。篠崎氏が一九二九年八月十三日葉書の地形研究を継続していることがうかがえます。

◇一九三〇(昭和五)年九月二十一日／封書
篠崎氏が九月十五日に送った震源地に関するレポートと「土佐日記」の大湊の推定などへの返事。震源地分布は色々な要因を踏まえて追求するよう助言し、篠崎氏が質問した断層線がほぼ等距離に出来ることについては、実験で同様のものができるが同じ構造かは不明であり、その間隔が何により決まるかは未知で、面白いが難しい問題だと答えています。

また、大湊推定について、地形から考えた篠崎氏の「大浦」説(池と市との間)に興味を示し、地形や沈積物など科学的な調査を行うよう勧めています。寅彦は

◇一九三〇(昭和九)年三月十六日／封書
篠崎氏の「科学」への原稿に対する助言と、木星の縞模様の研究を出発点として更に広く太陽や土星についても研究を進めるよう助言しています。

◇一九三四(昭和九)年四月五日／封書
太陽黒点の篠崎説について既に同様の説があり、その文献を読むことをすすめ、それらの文献の所蔵先を添えています。

◇一九三四(昭和九)年四月六日／封書
寅彦は、前日に紹介した文献の摘要を航空研究所で筆写し、篠崎氏に原著を読んで異同を明らかにしたうえで議論することの必要性を説き、研究所の田中信が原著を写真機で複写することを引き受けてくれた好意に対し一筆礼状を送るよう記しています。この書簡は寅彦が投函する前に落としたらしく、帰宅後に書き直したもののが次の書簡です。

◇一九三四(昭和九)年四月六日／封書
摘要の筆写を除き、ほぼ同じ文面で、複写は無償で一週間程度で出来そうだということが加えられています。
◇一九三四(昭和九)年六月五日／葉書
篠崎氏の試験成績の相関報告で、語学と数学の相関係数の少なさに着目し、文

文学館の評価について

館長 前田 英博

今、文化を取り巻く環境が大きく揺れています。

これまで、文化を育み、普及していくためには一定の金が必要なものと考へられていましたが、地方財政が厳しくなってきた折、文化も聖域ではないものとなつた。

このようなかで文学館の機能を考えると、図書館的機能と博物館的機能があるが、いずれも読むものであつて、見るものではないことから、来館者は文学愛好者を中心とした限られた者となつてくる。

多くの文学館は、関係する文学者の業績を顕彰するために設置されたものであり、その基本的事業は文学関係資料の調査・収集・保存・展示、文学講座や講演会の開催、文学関係情報の交換、交流の場の提供等である。そのた

県内同人誌紹介



『こうち童話』

現在同人の数は二十名。年齢幅も広く二十歳代から上は百歳に近い者たちが童話を書きたいという志を持ち、書くことに生きがいを持って切磋琢磨している。

例会は月一回。持ち寄った作品は、合評を通して推敲し、春・夏年二回、「こうち童話」に発表している。

作品は幼年向きのものから、かなり長編の物語、更に詩やエッセイもあり、幅広いジャンルにわたっている。子や孫に取材したものから、自分の幼い頃のこと。

ファンタジーから生活童話。また郷土の歴史や昔話をもとにしたもの等内容は様々である。各号に続く連載にして、完成後自費出版した者も過去数名いる。

また「こうち童話」は、県・市の図書館や各地公民館の一部、県外の同人誌等にも寄贈、交流を図っている。

「こうち童話」の会代表 山脇 映子

◇一九三四(昭和九)年四月六日／封書
寅彦は、前日に紹介した文献の摘要を航空研究所で筆写し、篠崎氏に原著を読んで異同を明らかにしたうえで議論することの必要性を説き、研究所の田中信が原著を写真機で複写することを引き受けてくれた好意に対し一筆礼状を送るよう記しています。この書簡は寅彦が投函する前に落としたらしく、帰宅後に書き直したもののが次の書簡です。

◇一九三四(昭和九)年四月六日／封書
摘要の筆写を除き、ほぼ同じ文面で、複写は無償で一週間程度で出来そうだということが加えられています。

◇一九三四(昭和九)年六月五日／葉書
篠崎氏の試験成績の相関報告で、語学と数学の相関係数の少なさに着目し、文

科を除いた理科のみの場合で相関を見てみたいと感想を記しています。

高知公園でミンミンゼミが鳴いていたことに対して、子供の頃は久万泉寺の山で稀にしか聞かなかつたので不思議だと感想を書いています。ミンミンゼミは結果に対し、寅彦が大学受験者を対象に係数の計算ではなく、X軸Y軸の座標で示すことを試みた結果を記し、篠崎氏にもその試みを勧めています。

◇一九三五(昭和十)年二月四日／封書
室戸台風で蝶形に割れたガラスの報告に対し文献を紹介しています。

◇一九三五(昭和十)年五月十三日／封書
ガラスの割れ方の研究を継続し研究がまとまつたら理化研究所の出版物へ発表を勧め、実験方法も提案しています。

◇一九三五(昭和十)年八月二十六日／封書
ガラスの割れ方の研究が進んでいることを喜び、別の実験を提案。理論と計算の試みに対しては、色々な場合のデータを集めた上で行うよう助言しています。

◇一九三五(昭和十)年九月二十六日／封書
海鳴りの調査に興味を示し、参考となる寅彦の論文を記し、観測データ収集の

際などについて別の実験方法を提案。重要な点を説いています。

◇一九三五(昭和十)年十月二十四日／葉書
実験結果を評価し、今までの研究をまとめることを勧め、「理研彙報」に発表するためには写真や挿絵の指示や英文での摘要も添えるよう伝えています。

寅彦の病状は思わしくなく、葉書は、次女の関弥生氏の代筆になっています。

この二十点の書簡で、寅彦は常に篠崎氏の研究を励まし、研究テーマを深めるための助言や文献の紹介をし、高知では入手が難しい文献には複写の手配までしています。科学研究が中心の書簡ですが、細やかな気配りにあふれ、弟子を大切にした寅彦の人柄が偲ばれる資料です。

(主任学芸員／川島 郁子)

手箱山・越裏門のあめご釣り

森下雨村

猪野
睦

もうずいぶん前になるが、本川の山荘からさへ行つた時のことである。夜になるとトのロビーから「越裏門寺川シン・サル・タヌキのお住まいどころ」と歌う奇妙な節まわしのテープが聞こえてきた。

この奥地に昔から伝わる歌だった。そういえば一昔前、嶺北出身の友人が酔うと両手に二枚ずつ皿を挟み、それをカチカチ鳴らしながら「エリモン・ラガワ・シン・サル・タヌキのお住まいどころ」と歌って聞かせてくれたことがあった。いまはほとんど聞くことがないが、本川から田井あたりまではやつていたらしい。

五月の県境山地の山莊しらさ周辺では、
おそい若葉が萌えていた。高知から車で伊
豆の山野を抜け、吾北村の仁淀川支流の上八川
忠地を抜け、左に折れて急流ぞいの道を
清水までゆくと、そこからは本川への登り
道になる。この伊野町も吾北村も本川村も
近年の広域合併でひらがなのいの町に変
わったが、仁淀川下流の平野から越裏門寺
川の県境山地までを、大きく呑みこんだ町
となつた。

いまはこの本川行きも改修工事のゆきと
いた峠道だが、以前はトンネルとカーブの
多い難路だった。峠を登りつめトンネルを抜
けると本川長沢だつた。そこから長沢ダムに
沿つて、カーブの多い道を走つた先が越裏門
につた。県境の関所のような地名だが中学校
があり、そこから切りたつ断崖の道を登つた
ところに山莊しらさがあった。向かいには一
八〇〇メートルの手箱山があつた。

めの釣り」「手箱山の仙人」にかいたのは、八十年を超す昔だった。あめご釣りの隨筆があるが、これを読みながら森下雨村が越義門へきて、そこから手箱山の溪流、滻壺に挑戦した昔に思いをめぐらせた。

小説の父といわれた名声も捨て、一介の野人となつて佐川へ帰ってきた。そして鮎釣りを中心とした釣三昧と農耕にあけくれた。手箱山のあめご釣りもそんななかでの隨筆だった。

四月下旬、森下雨村は伊野駅前で山林買収に本川へゆく知人の車を待つ。佐川から土讃線で伊野まできて、友人の自動車に乗せてもらい本川へ向かう。木炭車だったろう。おそろしい辞職峠とあるから当時の本川行きは難路だった。郵便局のある長沢で降り、あとはまだダムのない時代の長沢から溪流に沿つてリュックサックを背負い歩いて越裏門にたどりつく。吉野川最上流である。

森下雨村は越裏門に宿をとり、毎日あめご釣りにでかけた。村の青年に案内してもらい、川石をはがしてカゲロウの幼虫を餌にとり、溪流をさかのぼる。五日間釣ると相当のものになる。それを宿の主人に囲炉裏で串ざしにして焼いてもらい、それを土産に持ち帰る。五日間の釣りといえばもう釣狂というものだつたろう。

翌年も四月下旬に同じ場所にやつてくる。雨が降り水が濁るが二日もすると澄んでくる。それにしても藩の氷室のある手箱山の細流をかき登り、崖をよじ登り滝壺を探して竿を投げ込む。七寸の大あめごがかかつてくる。なんという贊沢、至福の日々だつたろう。斑点をもつ串ざしいろいろ焼きあめこは、いまでは幻の絶品といつていいいものだ。クーラーボックスも車もない時代の保存法だつた。

ひと昔前、あめご釣り名人といわれた同僚がいた。明日は休むきのうといつて奥地へ入つた。翌日クーラーボックスから見事な斑点のあめごを取り出し、ワタを抜き酢につけ飯をたいてあめご寿司をふるまつてくれた。やはり車時代というものだらう。今では手箱山も近いといふべきか。

▼廣田照子「廣田照子日本画作品集」
廣田照子著刊 他 ▼横田晴光「田
宮虎彦論」山崎行雄 オリジン出版
センターハイ ▼浜田重彦・ゴー
ディーサンディー 照下土竜 德間
書店」▼小波誠生「文豪の娘」ア
レクサンドラ・トルスターヤ亡命の
日々 小波誠生 新読書社 ▼東
元善次郎「高知県昭和俳句集成」川
島背戸・岩戸牙童編 高知県俳句連
盟合同句集編集委員会 他 ▼清水峯
雄「ドビシヤゴの村にて 吉村淑甫
椎野書房」他 ▼市原麟一郎・「子
どもに語る戦争体験物語」いのちか
がやく旅 市原麟一郎 リープル出
版」▼宮川昭男・「(合同句集) 松風
三水会編刊」▼公文 啟・「エツ

（七一集）ヘチヤモクレ放言 公文
徹著刊」▼北村文和・植木枝盛遺品
筆置き」他・植木枝盛（一八五七
～一八九二）は自由民権家。安政四年一月土佐郡井口村中須賀に土佐藩上植木弁七の嫡男として出生。慶応三年（一八六七）年から明治五（一八七二）年まで藩校致道館で学びました。七年に創立された立志社の結成集会で板垣の演説を聞き感銘を受け政治の道を志します。八年東京に出た枝盛は明六社や三田の演説会などを熱心に聴聞、図書館に通うなどして独学に励みました。新聞への投書も盛んに行い九年二月十五日付「郵便報知新聞」掲載の投書「猿人君主」により禁獄二ヶ月の刑を受けました。十年二月板垣に従つて帰郷した枝盛は三月立志社に入り活動を始めました。立志社は自由民権運動を全国展開するため、八年大坂に設立され事実上消滅状態になつていた愛

6月

◆◆◆ 文学館日誌 2005年6月～2005年8月 ◆◆◆



アメリカ在住のお孫さんたちにもご参加、ご覧いただけた。6月2日、「森下雨村展」は閉幕した。
写真は4月21日のオープニング。

- ◆ 2日 「森下雨村展」終了。◆ 3日 「ミニ特設展お殿様の本棚—山内文庫の世界」—8／14まで。◆ 11日 紙芝居の会。参加者7名。◆ 14日 文学館についての意見交換会。県庁職員9名。◆ 18日 第62回朗読の会。—シャーロック・ホームズ—第1部「気高い独身者」、第2部『ギリシャ語通訳』参加者24名。◆ 19日 文学館についての意見交換会。女性グループ9名。◆ 25日 「シャーロック・ホームズの倫敦」写真展開幕。／第3回日専門講座「ヘルマン・ヘッセ」—詩人・小説家への道—講師：高知大学人文学部人間文化学科教授・瀬戸武彦氏。受講者60名。◆ 29日 文学館運営協議会。参加者13名。
- ◆ 3日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」参加者13名。／スタンブラー開始。◆ 9日 紙芝居の会。参加者10名。／「シャーロック・ホームズと音楽」喫茶店での開催。
- ◆ 2日 博物館実習生徒8名。8／7まで。
- ◆ 9日 開館時間8時30分～18時まで時間

7月

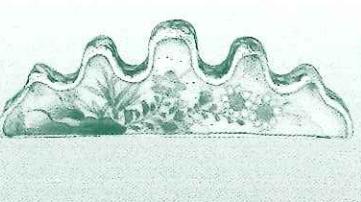
- ◆ 2日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」参加者13名。／スタンブラー開始。◆ 9日 紙芝居の会。参加者10名。／「シャーロック・ホームズと音楽」喫茶店での開催。
- ◆ 3日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」参加者13名。／スタンブラー開始。◆ 9日 紙芝居の会。参加者10名。／「シャーロック・ホームズと音楽」喫茶店での開催。

- ◆ 2日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」参加者13名。／スタンブラー開始。◆ 9日 紙芝居の会。参加者10名。／「シャーロック・ホームズと音楽」喫茶店での開催。



第8回朗読コンクール

(地区予選高知会場第3グループのみなさん・朗読を終えて)



植木枝盛遺品「筆置き」

延長。(14日まで)。◆ 13日 紙芝居の会。参加者7名。◆ 14日 「シャーロック・ホームズの倫敦」写真展終了。／土佐山内家宝資料館の展示「お殿様の本棚—山内文庫の世界I」終了。◆ 21日 山内一豊没後四百年企画「山内一豊と見性院」開幕。10／2まで。

◆ 20日 第8回児童生徒文学作品朗読コンクール大方地区予選。参加者80名。◆ 24日 第8回児童生徒文学作品朗読コンクール芸術地区予選。参加者60名。◆ 25日 高知県観光特使名刺1枚3名観覧。◆ 26日 第8回児童生徒文学作品朗読コンクール高知地区予選。参加者220名。／第64回朗読の会。第1部「山古志村のマリと三匹の子犬」第2部「火垂るの墓」参加者31名。◆ 27日 第4回専門講座「ヘルマン・ヘッセ」—内面への道—講師：高知大学人文学部人間文化学科教授・瀬戸武彦氏。受講者73名。

◆ 28日 第4回専門講座「ヘルマン・ヘッセ」—作品の変容—講師：高知大学人文学部人間文化学科教授・瀬戸武彦氏。受講者70名。◆ 29日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」。参加者21名。◆ 30日 森下時男氏来館。◆ 31日 ミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」。参加者20名。／第8回児童生徒文学作品朗読コンクール募集中込締切日。

国社を十一年に再興、枝盛はその機関誌である「愛國志林」(のち『愛國新誌』)と改題)を主宰します。愛国社から国会期成同盟、そして十四年十月我が国初の全国的組織政党「自由党」へと発展する中で組織運営に力を尽くしました。この活動の過程で立志社憲法草案起草委員として枝盛が起草した「日本国憲案」は現行の日本国憲法に重要な影響を与えました。十七年十月自由党が解党され翌年三月高知に帰った枝盛は九月に土陽新聞社に入社、同紙の社説欄で論陣を張ります。十九年一月に高知県会議員、二十三年七月の第一回衆議院議員選挙で第三区(香美郡、安芸郡)から当選。上京して活動を始めますが衆議院解散前から持病の胃腸障害が悪化し二十五年一月東京病院で死去。三十六歳。

ご寄贈の資料は、枝盛の死去に際し植木家の親族にあたる北村左久馬様(初代)が上京、引き取り保存されていました。遺品の一つで、高知大空襲の戦火をくぐり抜け伝わっている唯一のものです。現在当館の常設展示で展示しています。

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

